

られた証拠となるがまだ確認できていない。同じ場所で採集した土器底部の直径は4センチ前後で尖った平底である。胎土を見る限り土器口縁部（写真31）と同一土器ではない。砂岩製の磨製石斧は風化が進んでいるが全体が研磨されていたようである。また、破損した磨製石斧を再利用したと思われる礫器の石材は周辺から産出しない。スクレイパーは両側に丁寧に刃が付けられたサイドスクレイパーである。6個採集した黒曜石の2個は剥離面に光沢はなく灰緑色である。後日、長崎菜々子が実施した分析の結果、淀姫系と針尾I群がそれぞれ1個で腰岳系が3個、不明1個であった。「赤崎遺跡」対岸の唐舟志の海岸・段丘上で採集した黒曜石は全てが腰岳系であった。海を挟んで1.2キロメートルの距離であるが、違う産地の黒曜石が見つかることは興味深い。岬西側は竹が密生し通過は困難だが、段々畑があり海岸へ降りることが出来る。西側の段々畑及び海岸で遺物は確認できなかったが、岬基部から先端付近まで小円礫、拳大から人頭大の円礫が多数見られる。対馬の弥生時代に作られた墳墓の立地条件に合致するので、今後の調査により弥生時代の遺物が見つかる可能性は大きい。しかし、ここも段々畑を作るときに表土が採られているので遺構は破壊された可能性が大きい。



写真31 口唇部 (写真右側)



写真32 土器底部



写真33 スクレイパー



写真34 磨製石斧



写真35 礫器



写真36 敲石



写真37 黒曜石製品



写真38 口縁部拡大写真

(6) 新規発見の遺跡番号16 「^{うなつら}女連立岩遺跡 (仮称)」

①女連立岩遺跡 (仮称)

女連立ノ根の山が迫る土砂が堆積した海岸の遺跡で、崖面から土器、頁岩製石器、黒曜石剥片が見つかる。昭和40年代まで麦・サツマイモなどの畑作が行われ削平されているが、遺跡南側の遺物包含層は残っている。遺物は南側の崖面に集中し、人頭大から長さ120センチ×幅60センチ×厚さ30センチほどの大きな石付近 (写真39, 40) に多く見られる。このことから、これらの石は遺構の一部ではないかと考えている。また、角礫を主体とする堆積層に貝殻片を含む二つの海砂の層がある (写真41-1, 2)。この層が遺跡全体に広く分布するかは確認できていないが、海面が上昇したときの名残なのか、それとも誰かが運んできたものかは今後の調査で解明されると期待している。土器についてはクッキー状の焼成が悪いものばかりで型式のわかるものは見つかっていない。



図7 遺跡の位置 (国土地理院地図に加筆) S = 1/30,000



写真39 遺物包含層 (遠景)



写真40 遺物包含層 (近景)



写真41-1 海砂の層と包含層



写真41-2 海砂と白い貝殻片

②「女連立岩遺跡」の遺物

遺物は削平されずに残った遺構と思われる石の周辺に多く見られ、土器は脆く文様は確認できない(写真42-1, 2)。黒曜石剥片(同42-3)、打製石斧(同42-4)、頁岩・ホルンフェルス製のスクレイパー(同42-5, 6, 7)、砂利浜で自然面が残ったサヌカイトの礫(同42-8)を確認・採集した。遺物は赤土混じりの小豆大から空豆大の長円形海砂の二つの層に多く見られる。石器は黒曜石とホルンフェルス・硬質の頁岩で作られたものが多い。遺跡下の砂利浜からサヌカイトの円礫が見つかったのでサヌカイト製石器も出土すると考えているが、流水や波浪による崖面の崩落・遺物の流失が心配である。また、遺物が落ちていると思われる遺跡下の平坦地は、ハマゴウの群生があり踏み込むことは容易でない。葉が落ちる冬も密集した枝と漂着ゴミが絡んで遺物を見つけることは困難である。崖面は南側の一部が露出している他は、ハマゴウの枝が伸び見ることは出来ない。崖下の木材は、漂着したものを集めたものであり、ここで崖の土砂がせき止められ二次堆積層を形成している。この下から現在確認できる遺物より古いものが出土する可能性があると考えている。

遺跡下の海岸は大小の砂利が厚く堆積しているが、摩耗した土器や石器も含まれているはずである。石器石材のホルンフェルスと硬質の頁岩、サヌカイトは、形が崩れていても色と質感で判別できるので、使われている石材の使用比率が判りそうである。「越高遺跡」下の海岸ではサヌカイトの石器と小さな礫(剥片が摩耗したもの)が多く見つかる。次に黒曜石が多くホルンフェルスと続く。頁岩製石器は摩耗が進みやすく石器以外のものと見分けが付かないが、それらしきものを叩くと金属的な音がするので判別できる。根気を要することではあるがこの方法で「女連立岩遺跡」の石材使用比率を調べてみたい。

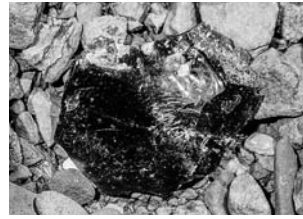
1 土器



2 土器



3 黒曜石剥片



4 打製石斧



5 スクレイパー



6 頁岩製スクレイパー



7 スクレイパー



8 サヌカイト礫



写真42 女連立岩遺跡の遺物

対馬に暴風雨をもたらした台風11号と14号が当遺跡に影響を与えてないかの確認踏査を令和4年9月25日(2022)行った。高波と強風により遺跡下のハマゴウの群落は幹だけを残す状態で、絡んでいた漂着ゴミと集められていた流木は見当たらない(写真43)。しかし、崖面は抉られ以前の包含層は崩落が進んでいたが、大小石を含む新たな包含層が現れている。遺跡下の平地やハマゴウの群落内で土器片(写真44)と黒曜石製鏃(同45)、スクレイパーを表面採集した(同46, 47)。崖面に現れた大小の石の下で文様が入った土器を見つけ位置情報を記録後採集した(同48~50)。また、黒曜石製鏃は長身の鍬形鏃であり、縄文時代早期に特徴的なものである。土器が越高遺跡や夫婦石遺跡で出土する隆起線文土器であるなら、鏃が作られた時代と一致する。



写真43 幹だけになったハマゴウの群落



写真44 土器片



写真45 鍬形鏃



写真46 スクレイパー



写真47 スクレイパー